

## 研究資料

## 資本主義的マニユファクチュアの諸問題

浅田毅衛

- 一 マニユファクチュア時代の年代的範圍
  - 二 マニユファクチュアの發生史
  - 三 マニユファクチュアの經濟的可能性
  - 四 マニユファクチュアの社会的本質
- 一 マニユファクチュア時代の年代的範圍

資本主義的マニユファクチュア論が全面的に展開された形ではじめて示されたのは、マルクスの「資本論」第一巻が最初である。しかし、マルクスやエンゲルスは、もつと以前からマニユファクチュアに関する問題にたいして関心をいだき、一八四

〇年代の後半にはすでに多くの重要な主張を確立していたのである。エンゲルスはその後もたびたびこの問題を論じて、マルクス主義の經濟学説を擁護したのである。

マルクスやエンゲルスは、マニユファクチュア時代を西ヨーロッパ經濟史の特定の一段階と考え、西ヨーロッパ全体についても、またこのいくつかの国についても、マニユファクチュア時代が歴史上存在した具体的な時期を明らかにするという困難な仕事をも決して回避しなかつた。エンゲルスは「共產主義の原理」において、「後期中世の諸都市には、ギルド親方、職人、日傭がいるが、一七世紀にはマニユファクチュア所有者とマニ

ユファクチュア労働者がおり、一九世紀には大工場主とプロレタリアートがいる」と書いている。<sup>(1)</sup>

したがって、エンゲルスはとくに一七世紀を西ヨーロッパの資本主義的マニファクチュアの歴史におけるもっとも重要な時期とみているわけである。

マルクスはアネンコフへの手紙のなかで、この重要な問題をもっとくわしく解決して、マニファクチュア時代は一七世紀のなかばに始まるとはつきり述べている。<sup>(2)</sup> 当時資本主義的マニファクチュアはオランダやイギリスだけでなく、フランスやドイツにもひろく普及していた。周知のようにマニファクチュアは、このころにロシアにも生れた。したがってマルクスの結論は全ヨーロッパの経済史によって証明されているということが出来るのである。

マルクスは、マニファクチュア時代の終りを一八世紀最後の三分の一期における産業革命の開始と不可分に結びついたものとしている。

その後「資本論」第一巻でマニファクチュア時代の年代規定の問題をふたたび論じたときにも、マルクスは一七世紀をマニファクチュア時代にいれ、<sup>(3)</sup> 「昔のドイツ製紙業は手工業的生産の典型であり、一七世紀のオランダと一八世紀のフランス

は厳密な意味におけるマニファクチュアの典型であり、現代イギリスは、自動的工場生産の典型である」と書いている。<sup>(4)</sup>

しかし、ヨーロッパでは資本主義的マニファクチュアの発展は、国によって時期およびひろがり異なるに異なした。したがってマルクスは「資本主義的生産の最初の萌芽は一四・一五世紀にすでに地中海沿岸の若干の諸都市において散在的にみられる」と指摘している。<sup>(5)</sup> イタリアの諸都市は、この時代には、その経済的發展において西ヨーロッパの他の諸都市をはるかにおいこしていたのであるから、このことは全く当然なことである。エンゲルスはこのことを考慮して「反デューリング論」のなかで「資本」という言葉そのものがはじめて使われるようになったのは、最初の歴史的な資本主義的国民である一五・一六世紀のイタリア人のもとにおいてであった」と述べている。<sup>(6)</sup>

フランドルやブラバントの毛織物業ではおなじく一四・一五世紀に問屋制度を伴う資本主義的マニファクチュアが存在した。その後一六世紀になると、地理上の大発見、オランダのブルジョア革命の勝利、イギリスの農業革命と関連する世界貿易の拡大の影響によって、資本主義的マニファクチュアは、これら両国にひろく普及するようになる。

マルクスが、資本主義的マニファクチュアの発生史におい

て特に重要な地位を与えているのは、資本の支配下における雇傭労働の単純協業である。「資本論」は、このような協業がひろく普及した時期についてはっきりした規定を与えてはいないけれども、それはかれが「単純な形態の協業は比較的大規模な生産と一致するが、資本主義的生産発展のある特殊な発展時代の固定した特徴的形態をなすものではない」と考えているからである。したがって、単純協業の普及した時期を確定する必要はないのである。

しかし、だからといって資本による雇傭労働の単純協業の歴史的地位がマルクスにとって不明確であったということには決してならない。反対に、マルクスはいくたびもそれが資本主義的マニファクチュアの前身であり「手工業的な資本主義的マニファクチュアの萌芽の時代には一定の役割を果たした」ことを強調しているのである。マルクスは「単純協業はつねに分業や機械が重要な役割を演ずることなく資本が大規模に作用するような生産諸部門の支配的形態である」とはっきり述べているのである。<sup>(9)</sup>

したがって、マルクスは資本の支配下における雇傭労働の単純協業を、マニファクチュア（分業を伴なう）や工場（つまり資本主義的生産の機械化）に先行する資本主義的生産の初期

形態とみなしているのである。西ヨーロッパにおいて資本主義的マニファクチュアが大量に普及したのをマルクスは一七世紀なかばのこととしているのであるから、かれが資本主義的単純協業の歴史を主として一六世紀と結びつけて考えているとみてよい。

したがって、マルクスはまた「資本主義的時代はやっと一六世紀からはじまる」ともいっている。<sup>(10)</sup>一六世紀のイタリア、オランダ、イギリスに資本主義的マニファクチュアがひろくみられたことと資本主義的協業もいたるところにみられたことは、このような時期規定の正しいことを十分に証明している。

しかし、マニファクチュアは、ロシアだけでなく西ヨーロッパでも、産業革命のはじまった以後の一九世紀になっても未だ存続していた。産業革命は多くの生産部門において長期の期間を要した。工場は、決して一挙にマニファクチュアを一掃しはしなかった。たとえば、ドイツでは一九世紀にもなお分散型の資本主義的マニファクチュアの一変種たるいわゆる「家内工業」がひろくみられたことをエンゲルスはみとめている。

イギリスの多くの工業諸部門について、一九世紀の六〇年代はじめにそれらが「マニファクチュア、手工業、家内労働の工場生産への革命的な移行の時期にあった」といえるとマルク

スは考えている。<sup>(11)</sup>

このようにマニユファクチュアは、もともと進んだ資本主義国イギリスでも多くの産業部門で一九世紀後半まで存続したのであり、同時にドイツやフランスでも存続し、これらの諸国ではその廃絶の過程は長期にわたる苦痛にみちたものであったのである。

以上を総括して、マルクスは「社会的生産様式の変革」というこの生産手段変化の必然的な産物は過渡的諸形態の錯雑した混沌のうちで行われる<sup>(12)</sup>」のであって、「社会の歴史の諸時期は地球史のそれと同じように抽象的で厳密な限界線によつて区分されはしない<sup>(13)</sup>」と述べている。

西ヨーロッパ史におけるマニユファクチュア時代の年代に関するマルクスやエンゲルスのこのような主張は、ロシアや日本のような後進国におけるマニユファクチュアの歴史の多くの問題の解決のためにもきわめて重要であろう。マルクス、エンゲルスの結論は、ヨーロッパ工業史上のマニユファクチュア時代において、ロシアや日本においてはマニユファクチュアの発生期の時期の点では、イタリア、オランダ、イギリスにおくれるだけであるという根拠をわれわれに与えてくれるであろう。

(1) 「マルクス・エンゲルス選集」(大月版)第二巻、四七四頁。

- (2) 同書、第一巻、四〇二—三頁。
- (3) マルクス「資本論」(青木文庫) 第一部、六二四頁。
- (4) 同書、六二四頁。
- (5) 同書、一〇九五頁。
- (6) 「選集」 第一四卷、三六九頁。
- (7) 「資本論」第一部、五六一頁。
- (8) 同書、五六一頁。
- (9) 同書、五六一頁。
- (10) 同書、一〇九五頁。
- (11) 同書、七五七頁。
- (12) 同書、七五五頁。
- (13) 同書、六一〇頁。

## 二 マニユファクチュアの発生史

資本主義的マニユファクチュアの発生史の問題にうつるには、マルクス、エンゲルスが近代資本主義の起源についてのブルジョア経済学の弁護論的臆説をばくろし、いくたびかその発展の条件や具体的諸形態を詳論していることにわれわれは注意する必要があるだろう。

たとえば「哲学の貧困」において、マルクスは、権力が、資本が種々の労働を集結し管理する本来の意味でのマニユファクチュア工業が、いかに発生したかを知ることが必要であると、

そして、その工業の形成の必要條件は「アメリカ発見と貴金屬輸入によつてたすけられた資本の蓄積であつた」と述べている。<sup>(1)</sup>

その外にマルクスは、他にもその条件を見出して、インドへの海路発見以後の商品量の増加や、さらに植民地制度の創設や海上貿易の全般的發展をも指摘している。マルクスは、封建貴族が奉公人を解放し、その結果マニユファクチュア出現以前にほとんど至るところに浮浪人があふれていたことをも、中世後期における資本主義的マニユファクチュア發展の補助的條件とみている。

マルクスによれば、さらに、マニユファクチュア工業は、畑が牧地にかえられたために、また農耕の進歩のため、農業における労働力需要が減少したことによつて都市に移り住むようになった大量の農民によるところが大きかった。

マルクスは、その分析を総括して、「市場の拡大、資本の蓄積、諸階級の社会的地位の変化、これまでの収入源を失つた大量の人びと、これらがマニユファクチュア形成の歴史的條件であつた」と<sup>(2)</sup>いっている。

マルクスはブルードンを批判して、「マニユファクチュアは古い同業組合の胎内に生れたのではない。新しい仕事場のかしらになつたのは商人であつて、旧來のギルド親方ではなかつた。

ほとんどどこでもマニユファクチュアと手工業のあいだははげしい闘争が行われた。分業は生産手段と労働者があらかじめ集中されていたことにもとづいていた」と述べている。<sup>(3)</sup>

マルクス、エンゲルスは、資本主義的マニユファクチュアが封建制の胎内でひろく普及したが、封建的生産様式が深刻な危機にあつたために、封建的生産様式の諸關係が變形させられたことにもとづいていたことを強調している。かれらは、生産と販売についてのやかましい規則を伴うギルド手工業が、地理上の大発見以後ヨーロッパのブルジョアジーが真に世界的な市場、植民地掠奪、際限のない投機の舞台に登場するようになった時代の新しい情勢のもとでは経済的になり立ちえなかつたことを指摘している。マルクスは、資本主義的マニユファクチュアが商人によつて作られたこと、ギルド組合の外に中世ギルド手工業とのはげしい闘争のなかで生れたことを、はっきりと述べているのである。

その後「資本論」第一巻でマルクスは、資本主義的マニユファクチュアの發生史の問題を、マニユファクチュアに関する章の一節で詳論し、他の多くの諸章でもこれに言及している。この場合にかればこの問題を新しく提起し直し、資本主義的マニユファクチュアの歴史における重要な地位を資本の支配下にお

ける雇傭労働の単純協業に与えているのである。

マルクスは「ただ一人の資本家の指揮の下での多数の労働者の作業は、歴史的論理的に資本主義的生産の出発点をなす」とはつきり述べている。<sup>(4)</sup> 協業を、同一の労働過程または異なつてはいるが互いにつながるのある諸労働過程に多くの人がひとが計画的に共同に参加する労働形態と規定して、<sup>(5)</sup> マルクスは、協業は人類文化の萌芽段階において生産手段にたいする共同体的所有と氏族的結合の結果として自然に発生した<sup>(6)</sup> (インド共同体の例によつてみれば)と指摘している。その他、エジプトのピラミッドの建設の例が示しているように「古代世界、中世、現代植民地における大規模な協業の散発的な使用は、直接の支配従属関係、たいていは奴隸制にもとずいて<sup>(7)</sup>」と。さらに、マルクスはこのような協業の前資本主義的形態を資本による労働の協議と原則的に対置している。なぜなら「協業の資本主義的形態はすでにその最初から自己の労働力を資本に販売する自由な雇傭労働者を前提とする<sup>(8)</sup>」からであると。

その後も「協業は依然として資本主義的生産様式の基本形態であり<sup>(9)</sup>」比較的成熟した形態においては資本主義の発展に巨大な役割を演ずる、というのは「分業にもとづく協業はマニユファクチュアにおいてその典型的形態を作り上げる<sup>(10)</sup>」とマルクス

は述べている。

このようにして、マルクスは、単純協業労働が資本主義的マニユファクチュアの発展の出発点をなす生産形態であることを学界ではじめて明らかにし、かれが「資本論」で展開した主張は、マニユファクチュア時代における資本主義発生史の全ての問題を新しいやり方で明らかにしたのである。マルクスは資本主義的生産様式のごく初期において雇傭労働の資本主義的搾取の原始的なもつとも単純なしかしきわめて屈伸性にとむ形態がこの過程で大きな役割を果たしたことを指摘している。後になつてはじめてそれらから分業に基づく複雑な協業であるところの資本主義的マニユファクチュアが生れたのである。こうしてマルクスは、経済学史に新しいページをひらき、資本主義的搾取のはじめは不安定ではあるがしかし基本的な萌芽的形態をばくろすることによつて資本主義的マニユファクチュアの発生史の問題を解決したのである。

その外に、マルクスは、四〇年代後半の著作とはちがって「資本論」第一巻ではすでに資本主義的マニユファクチュアが二つの径路で発生したと指摘することによつて、その発生の具体的な径路をも明らかにしている。一方の場合には、資本家の指揮下で多くの自立的な手工業の労働者の結合が行われる。その例

は馬車製造、ラシャ製造その他の生産の歴史である。もう一方の場合には、マニユファクチュアは、たとえば紙、活字、針などの製造のような同一ないし同種の仕事を多くの手工業者を一資本家が共同の仕事場に集めるといふ相反したやり方で行われるのである。マルクスは、マニユファクチュア発生の第二の径路の特徴を述べて「これはもっとも単純な形態の協業である、というのは、ここでは各手工業者が製品の全体をつくり上げるからである<sup>(11)</sup>」といている。

マルクスが結論で書いているように、マニユファクチュアは、手工業から二つの径路で、つまり自立的手工業の結合または同種の手工業者の協業によって生れてくるのであり、その場合には手工業が部分作業に分解するのである。<sup>(12)</sup>

したがって「資本論」でマルクスは、資本主義的マニユファクチュアの発生史の一般的条件を明らかにしただけではなく、その発生の具体的径路をも明らかにしたのである。しかもこの場合にもっとも重要な問題は、マニユファクチュアの分業の複雑な体系が資本家の専制的な支配のもとにどのようにして生れたかという問題であって、マルクスはその唯一の正しい解決を発見したのである。この分業は、既に部分化している手工業の結合ないしは同じような手工業者のマニユファクチュアへの

集中にもとづく同種の手工業の分化によってのみ生れえたのである。

資本主義的マニユファクチュアの発生史の問題は、このようにして、マルクスの「資本論」において解決されたのである。

初期の著作と同じく、「資本論」でもマルクスは、ギルドを資本主義的マニユファクチュア発展の重大な障碍とみなし、その確立は手工業の同業組合的規制とのはげしい闘争によつてはじめて行われたことを強調している。たしかに、西ヨーロッパのギルド史が示しているように、一四・一五世紀にギルド親方小商品生産者のなかにときとして資本主義的傾向がみられ、これはとくに職人や徒弟の労働にたいする規制によくあらわれている。しかしそれにもかかわらず、西ヨーロッパではギルド親方のなかから大きなマニユファクチュア主があらわれたのは比較的少なかった。マルクスが前に主張した命題をさらに発展させて、資本主義的マニユファクチュアが主として中世手工業のギルド組合の範囲外にあった沿海都市や商業集落に形成されたといっているのは、そのためである。

そのかわりに、マルクスは資本主義的マニユファクチュアの創設に大きな役割を果たしたのは、大きな資本と販売市場をもつたあらゆる種類の商人や買占人であったといっている。ヨーロ

ツバ工業史におけるマニユファクチュア時代そのものを、マルクスはいわゆる資本の原始的蓄積のすべての諸条件と密接不可分に結びつけている。かれは「資本論」第一巻で「植民制度、国債、重税、保護貿易制度、商業戦争等々、本来的マニユファクチュア時代のこれらの芽生えは大工等の幼年期に大きく成長する<sup>(13)</sup>」と書いている。かれは「資本論」第二巻、第三巻でもいくたびかこの問題にふれている。

マルクスは、西ヨーロッパの商人層が資本主義的マニユファクチュアの創設にもっとも積極的な役割を果たしたとしている。一六・一七世紀の資本は、まさにこれら商人の手中に集中されていたのであって、広大な世界市場もまたかれらの手とどくところにあつたのである。商人層はギルドの生産規制から自由であり、商品の大量生産をめざして資本主義的マニユファクチュアを創設するのに必要なのは、十分な労働力資源だけであつたが、それにもまたかれらは不足を感じなかつたのである。

マルクスが述べているように、中世には比較的少数の都市労働者しかなく、これを搾取するだけでは植民地市場の需要をみたすことは出来なかつた。このようなときにマニユファクチュアは、封建制の解体過程で土地を失つた農民にたいして新しい生産領域をひらいたのである。<sup>(14)</sup>

その結果、資本主義的マニユファクチュアの広汎な普及とマニユファクチュア時代とよばれる資本主義史上の一時代の開始のための必要条件がすべてそろつたのである。

エンゲルスもまた資本主義的マニユファクチュアの発生史について同じような見解をもっている。マルクスと同じくかれも、資本主義的マニユファクチュアの歴史に商人がきわめて重要な役割を果たした<sup>(15)</sup>としている。

マルクスとエンゲルスは、資本主義的マニユファクチュアの発生の大きな土台（物質的社会的）となつたのは親方の技能を高い水準に引上げ、手工業者の深刻な社会経済的分化を生み出していた中世の手工業であると考えている。ギルド規制のさまたげにもかかわらず、ギルド親方のあるものは、とにかく小資本家となり、職人を搾取する資本主義的マニユファクチュアをつくり出した。

さらに、マルクス、エンゲルスは、西ヨーロッパのギルド工業の胎内でマニユファクチュア工業の形成はかなり緩慢であつたが、それはギルド親方の手中での資本蓄積の可能性がギルド法規の売買や生産にたいするうるさい規制のために大きく妨げられていたからであるといっている。したがって、西ヨーロッパではマニユファクチュアは主として中世手工業のギルド制度



の枠外で、しかもその技術と人的資源を用いて発展したのである。技術や人的資源は資本家によって、古来の手工業中心地ではなくて、ギルド規制やギルド長老の監視の外にある商業集落や都市に集中された。

こうして、西ヨーロッパにおけるマニユファクチュアの発展をマルクス、エンゲルスが中世ギルドの労働資源をはるかにこえる農民の労働力資源が工業に大きくひきこまれた過程とみなしていることは非常に重要であろう。

- (1) 「マルクス・エンゲルス選集」 第一巻、 四〇二頁。
- (2) 同書、四〇三頁。
- (3) 同書、四〇四頁。
- (4) マルクス「資本論」第一部、五四三頁。
- (5) 同書、五四八頁。
- (6) 同書、五六〇頁。
- (7) 同書、五六〇頁。
- (8) 同書、五六〇頁。
- (9) 同書、五六二頁。
- (10) 同書、五六三頁。
- (11) 同書、五六五頁。
- (12) 同書、五六六頁。
- (13) 同書、一一五二頁。
- (14) 同書、六九五頁。

(15) 「選集」第一四巻、二一八頁。三〇四頁。

### 三 マニユファクチュアの経済的可能性

マルクス、エンゲルスは、その特殊研究や総括的な著書のなかで、資本主義的マニユファクチュアの可能性を深く分析した。それによってかれらは複雑な歴史的発展のすべての時期の内容を明らかにすることを通じて、資本主義と近代工業の歴史におけるマニユファクチュア時代の経済的基礎を明らかにしたのである。

マルクス、エンゲルスは、マニユファクチュアの経済的可能性を何よりもまず雇傭労働者たちのあいだの分業と結びつけ、四〇年代後半の著作のなかですでに、このことをはっきりと解明している。かれらは、分業を社会的に規定された現象と考えている。たとえば「哲学の貧困」のなかでマルクスは「社会内部の分業に権力が関与する程度が減少するにつれて、仕事場内部の分業がそれだけさかんになり、直接生産者がただ一人の人間の支配に従属するようになる」と書いている。<sup>(1)</sup>

それとともにマルクスは、マニユファクチュア時代の分業の前提が生産手段と労働者の集中と蓄積にあることを明らかにした。<sup>(2)</sup>したがって、かれの見地からすれば、生産手段の集中と分

業とは一般にたがいに切りはなしえないものである<sup>(3)</sup>。

このようにして、ブルードンを批判した著作においてすでに、マルクスは、分業一般およびとくにマニユファクチュア的分業の技術的、経済的、社会的前提を明らかにした。かれはブルードンの臆説を批判し、分業が歴史的に発展する過程であること、を明らかにし、とくに地理上の大発見以後の世界市場の急速な拡大がそれに影響したことを指摘している。

だからマルクスは、その後「資本論」第一巻において「哲学の貧困」のなかですでにマニユファクチュア的分業が「資本別の生産様式の独自の形態」であることをはじめて明らかにしたと述べているのは全く正しいのである<sup>(4)</sup>。

しかし、当時まだマルクスはマニユファクチュアにおける分業を、後に「資本論」でしたほどには重視していなかったことは指摘しておかなければならない。かれは「哲学の貧困」のなかに、マニユファクチュアの特徴は、分業というよりもむしろ多くの労働者と労働過程の一ヶ所への結集にあるとはっきり述べている<sup>(5)</sup>。しかし、これにはマルクスが直面していた論争のための影響がみられるのである。かれは労働力の集中とマニユファクチュアにおいて資本の専制支配のもとでその搾取が行われることを強調し、分業と小工業の有利さやその社会的な可能

性についてのブルードンの小ブルジョアのイデオロギーをばくろしようとしたのである。

全体としてはマルクス、エンゲルスは四〇年後半にすでに、マニユファクチュアの経済的可能性の基礎は分業であって、この生産が大規模ではないと考えていた。たとえばエンゲルスは、「共産主義の原理」で、分業は、各労働者の労働作業を単純なくりかえされる機械的なものにすることによって、商品の製造をやめ、低廉にすると述べている<sup>(6)</sup>。

ただし、エンゲルスは手工業から工場とプロレタリアートの形成への移行を一般的な形で述べているが、かれの述べているのは初期の工場についてだけではなく、後期のマニユファクチュアについても述べている。

当時すでにマルクスは、「哲学の貧困」のなかで、すべての大発明は分業を強化し、後者は技術面での新しい発明をもたらずと述べることによって、分業と技術的進歩のあいだの相互関係についてのテーゼを展開しているのである<sup>(7)</sup>。それとともに「賃労働と資本」ではマルクスは「分業がすみ、機械が増加し、分業および機械の利用される規模が拡大される」と述べている<sup>(8)</sup>。

したがって、マルクス、エンゲルスは当時すでに分業の経済

的役割を、商品の低廉化、機械の生産への採用などと関連させることによって、もっとも重要なものと考えていたのである。

しかし、分業にもとづくマニファクチュアの経済的可能性をマルクスが完全に明らかにしたのは、「資本論」第一巻においてであって、そこではこの問題が大きな地位をしめている。

マルクスは、この問題の専門的研究に、これを解決する新しい要素をとりいれ、雇傭労働の複雑な協業であるマニファクチュアの経済的可能性を明らかにするために、単純協業の経済的長所をとくに重視している。

かれはこれについて「労働様式はかわらなくても多数の労働者を同時に使うことは、労働過程の物質的条件に革命をひきおこす<sup>(9)</sup>」と述べている。さらにマルクスは、単純協業においてすでに、「問題は協業によって個別的生産力がたかまることだけでなく、本質的に大衆の力であるところの新しい生産力の創造にもあるのだ」と指摘している<sup>(10)</sup>。かれは、協業の技術的效果の大きい例としてエジプトのピラミッド建設をあげている。すなわち、協業によってえられる労働生産力の増加の仕方はきわめて多様である。というのは必要な経済的效果は労働の力学的な能力をたかめることによって、その作用範囲の拡大によって、生産の舞台の縮小によって、決定的瞬間に大量の労働を動かし

うること、競争の刺戟、多くの人びとの同種の作業を連続的なものにする、さまざまの作業が一時に行われるようにすること、共同使用による生産手段の節約、個別労働を社会的平均的労働にかえることなどによってあげられるからである<sup>(11)</sup>、とマルクスは述べている。

しかし、マルクスはこれらの場合にも結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力である、と述べている<sup>(12)</sup>。

したがって、マルクスはマニファクチュアの経済的可能性の第一の基礎は、労働の生産力を異常にたかめる資本による協業にあると考えている。マルクスは結合労働の生気にみえた力を明らかにし、協業は古い生産様式のもとでも新しい生産力をつくり出すと指摘している。マルクスは、協業にふくまれる巨大な創造力を明らかにしたが、それは資本の専制支配のもとで行われることを指摘した。これらの力は、マニファクチュアでもつかわれ、資本主義発展の初期つまりマニファクチュア段階においても大きな経済的效果をあげたのである。

それとともに、マルクスはマニファクチュアの経済的可能性を分業の深化によっても説明し、「資本論」第一巻で一章をさいてこれを論じた。マルクスは分業を協業の一種として扱い、マニファクチュア生産の分業体系のなかでは労働者の肉体そ

のものが、その自動的に働らく一面的な機関となり、それによつて単純化された労働により短時間しか費さなくなるので、したがつて、結合した総労働がより多くの生産物をつくり出すと述べている。マニユファクチュアは個々の労働者を名人にし、労働の連続性と単調性がエネルギーの上昇に必要な注意の緊張を減ずる、とマルクスは述べている。<sup>(13)</sup>

その外、マルクスは、労働用具の分化もまたマニユファクチュアの特徴であり、その経済的可能性を増大する。なぜなら「マニユファクチュア時代は労働用具を部分労働者の全く特殊な機能に適応させることによつて単純化し、改善し、多数にするからである」<sup>(14)</sup>といっている。その結果部分労働者とその用具はマニユファクチュアの単なる要素となった。

労働のマニユファクチュア組織の複雑な形態についてのマルクスの指摘はきわめて興味がある。ここでは労働者のうちで各グループがすでに分割された労働体であり、その例は、イギリスの数個の労働者グループが一ヶの解熔炉でガラス雲をつくる場合である。十八世紀のウラル工業でもこのような複雑な労働組織形態がひろく行われていた。

イギリスでいくつかのガラス工場がみずからつぼを作つてゐることによつて、マルクスは、マニユファクチュアはときには

さまざまな手工業の結合によつて生れたが、その後さまざまなマニユファクチュアの結合に転化することもある、といつてゐる。<sup>(15)</sup> マニユファクチュア労働者は機械の一部として機械とおなじく規則的に働かなければならない。マニユファクチュアは労働力のヒエラルキーを生み出し、労働力の使用の経済的效果をたかめる。<sup>(16)</sup>

マルクスは、マニユファクチュアを無条件的に進歩的現象とみなし、「単純協業ががいて個々人の労働様式を不変にしておくのに、マニユファクチュアはそれを下から上まで革命する」と断言していさえる。<sup>(17)</sup> ただしマルクスは、この場合に生産様式の社会的側面（個人労働力の完全な従属とその搾取の強化）を主として考慮しているが、マニユファクチュア的分業に反映しているマニユファクチュアの技術的成果をもいくらか考慮している。<sup>(18)</sup> これは、後にしだいに合目的な形態をとるようになったのである。

マニユファクチュアは機械の出現を準備した。マルクスは、「資本論」第一巻で、マニユファクチュア時代は労働用具を単純に改善し、それによつて多くの単純な道具の結合である機械の物質的前提のひとつを準備する、とはっきり述べている。<sup>(19)</sup>

マルクスは、マニユファクチュアのもっとも重要な成果のひ

とつは、労働用具そのものの生産の作業場およびとくに複雑な機械的装置のための作業場である、というのはそれによって、マニユファクチュア的分業によって機械の生産が準備されたからであるといっている。<sup>(20)</sup>その後工場制工業の真物の機械が現われても、機械の労働用具はいつもかわらず手工業ないしマニユファクチュアの様式でつくられるのである。<sup>(21)</sup>

しかし問題は機械出現の技術的準備に限られず、機械はしばしばマニユファクチュア内部ですでに使われていたのである。

マルクスはマニユファクチュア時代は、商品生産に必要な労働時間を急激に少くし、多くの人間と労働力の消費を必要とするようなところでは（たとえば生産の準備段階で）機械の散発的な使用を可能にすると考えている。<sup>(22)</sup>かれは、マニユファクチュアでの機械の使用は可能であり、経済的根拠があると考えている。なぜなら生産費の低下は資本主義的マニユファクチュアでは規定的な原理となるからである。マルクスは、製紙マニユファクチュアでほろをくだくための粉碎機や碎鋸機をあげ、

このような散発的な機械使用が十七世紀にすでにきわめて重要な役割をはたし、それが近代力学の創出のための大きな数学的土台と刺激を与えたといっている。<sup>(23)</sup>しかしこの問題でとくべつな役割を果たしたのは水車であって、総じて機械の歴史は製粉水

車の歴史によってたどられるといっている。

製粉機をマルクスは機械と考へ、それがマニユファクチュアの歴史、産業革命の準備に非常に大きな役割を果たしたといっている。<sup>(24)</sup>

「資本論」第一巻に述べられたマニユファクチュアの経済的可能性についてのマルクスの見解は以上のようなものである。

かれは資本主義的大生産としてのマニユファクチュアの手工業にたいする経済的優越は何よりもまず単純協業や複雑な協業の使用にあるといっている。そして、マルクスは協業労働の経済的可能性を解明した。集団労働の創造的能力を分析した結果、マルクスは協業労働は新しい生産力をつくり出し、その使用の経済的效果は、労働に参加するすべての孤立的生産者の労働の結果の総額をはるかにこえると考へるのである。

エンゲルスは、デューリングを批判し、量の質への転化についての弁証法の法則を明らかにして、協業と個別諸力の一つの力への統一は新しい力を生み出すことを指摘した。<sup>(25)</sup>

マルクスは経済学者の前に、新しい考への世界をひらき、マニユファクチュア時代の初期資本主義は一〇〇年の間、その技術によってではなく、新しい生産力をつくり出す協業によって強力となったと指摘している。その後分業とその用具の専

門化は、マニユファクチュアをギルドや非ギルド的手工業にた  
いしてますます大きく優越させることによって、協業の創造的  
な力を実現したにすぎなかった。

それ故マルクスは、マニユファクチュア時代の経済学者アダ  
ム・スミスがすでに多くのことを書いているマニユファクチュ  
ア的分業について全く別の解釈を与えることが出来た。ブルジ  
ョア経済学者たちはマニユファクチュアにおける分業を技術的  
合目的性の問題としてだけ描いている。マルクスは雇傭労働の  
資本主義的搾取の体系における社会的基礎や経済的機能をばく  
ろし、社会的分業と全くことなるマニユファクチュア的分業の  
経済的本質を明らかにした。

マルクスはマニユファクチュアでは労働力が生産様式の変革  
の出発点であると述べたが、かれはマニユファクチュアの枠内  
では生産技術そのものの発展の可能性が全くないとは、決して  
いっていない。反対に、かれは労働用具の専門化が大いにす  
み、機械製造の技術的前提が準備され、マニユファクチュアで  
機械が散発的に使用されることを指摘した。

これらがまともにマニユファクチュアに活力を与え、それ  
にたいして大きな経済的可能性をひらき、ばらばらな手工業に  
たいする一定の優位を与えたのである。

要するにマニユファクチュアは孤立した手工業者の仕事場よ  
りも廉価で商品を生産出来るので、エンゲルスもこれを重視し  
た。かれは一八九五年に「価値法則と利潤率」の論文で、マニ  
ユファクチュアが急速に発展しえたのはまさにその生産物がや  
すいためである、といっている。<sup>(27)</sup>

これらマルクス、エンゲルスのマニユファクチュアの経済的  
可能性の分析は、産業発達の原因を明らかにするために重要な  
意義をもっているといえるだろう。

- (1) 「マルクス・エンゲルス選集」第一巻、四〇一頁。
- (2) 同書、第一巻、四〇三頁。
- (3) 同書、第一巻、四〇四頁。
- (4) 「資本論」第一部、六〇二頁。「選集」第一巻、四〇七頁。
- (5) 「選集」第一巻、四〇三頁。
- (6) 同書、第一巻、四六六頁。
- (7) 同書、第一巻、四〇六頁。
- (8) 同書、第二巻、二五九頁。
- (9) 「資本論」第一部、五四六頁。
- (10) 同書、五四八頁。
- (11) 同書、五五三頁。
- (12) 同書、五五三頁。
- (13) 同書、五六七―五六九頁。
- (14) 同書、五七一頁。

- (15) 同書、五七九頁。
- (16) 同書、五八二—三頁。
- (17) 同書、五九七頁。
- (18) 同書、六〇二頁。
- (19) 同書、五七〇頁。
- (20) 同書、六〇九頁。
- (21) 同書、六一三頁。
- (22) 同書、五八〇頁。
- (23) 同書、五八〇頁。
- (24) 同書、五八一頁。
- (25) 「選集」第十四卷、二五〇頁。
- (26) 「資本論」第一部、六一〇頁。
- (27) 「選集」第十六卷、一六六頁。

#### 四 マニユファクチュアの社会的本質

マルクス、エンゲルスはマニユファクチュアの社会的本質を大いに重視した。かれらはそれを資本主義的生産様式の一形態と考えている。

したがって、かれらはいくたびもマニユファクチュアの資本主義的性格を指摘している。

ブルードン批判のための著作において(「哲学の貧困」)、すでにマルクスは、前述したように、マニユファクチュアの分業を

「資本主義的生産様式の特異形態」<sup>(1)</sup>とみ、ブルードンの小ブルジョアの幻想を批判している。とくに、マルクスは、資本主義社会の分業に独特な「職種別白痴」<sup>(2)</sup>を指摘している。

それとともにエンゲルスもこの時期四〇年代後半の著作において、マニユファクチュアをギルド手工業をもつ封建制と対立する資本主義的生産様式の一形態と考えた。「共産主義の原理」でエンゲルスは、中世の末に封建的ギルドの所有に従属されなるところのマニユファクチュアという形の新しい生産様式が生れたと述べている。<sup>(3)</sup>

ただしエンゲルスはマニユファクチュア労働者と十九世紀の工場プロレタリアートをはっきり区別している。かれは十六世紀—十八世紀のマニユファクチュア労働者はほとんどどこでも自分の道具と小さな土地をもち、仕事のない時にはこれを耕作した。十九世紀のプロレタリアートはどちらももってはいなかった。エンゲルスは、この考えを發展させてマニユファクチュア労働者はほとんどどこでも農村でくらし、地主や使用主にたいしてある程度家長的關係にあったといっている。<sup>(4)</sup>

しかし、マニユファクチュアの資本主義的性質を解明した深い定式化をマルクスはその後「資本論」第一巻で述べた。かれは、「資本主義的生産過程の推進的動機と規定的目的は、資本

の価値を出来るだけ多く自己増殖することであり、<sup>(5)</sup>それは労働力搾取の増大によってえられるといっている。この点で重要なのは「資本の支配下における単純協業であって、協業は資本主義的生産様式の基本的形態である」<sup>(6)</sup>といっている。

マニユファクチュアについては、マルクスは、資本主義の特殊的な生産形態であり、「相対的剰余価値を生みだすための、または労働者の犠牲によって資本の自己増殖をたかめるための特殊な一方法にすぎない」と考えている。マルクスの叙述によれば、マニユファクチュア分業は資本の労働にたいする支配のための新しい条件をつくり出すのであって、「文明化された洗練された搾取の手段」である。分業そのものはマニユファクチュア主の資本の大きさに依存するとマルクスは註で補足している。<sup>(7)</sup>

マルクスは、マニユファクチュアがすでに労働力の価値減少をひきおこす、というのは手工業では全くその存在を許されない非熟練労働者の範疇をつくり出すからであると考えている。<sup>(8)</sup>

マルクスは、マニユファクチュア的分業にもとづく資本主義的搾取の拡大を全く合法的な現象とみなし、生活手段や生産手段がますます資本に転化するのにはマニユファクチュアの性質そのもののためであるといっている。<sup>(9)</sup>

マルクスは、労働者が畸形者となり、資本が協業の創造的な

力をわがものとし、多種多様な労働の協業によって生ずる生産力が資本自体の生産力としてあらわれるようなマニユファクチュア的分業の資本主義的性質を分析した。部分労働者が失うものは反対に資本の手に集中される。こうしてマニユファクチュア労働者にたいして「分業は資本の所有なることを示す刻印でおす」<sup>(10)</sup>と。

さらにマルクスは、マニユファクチュア時代の階級対立をばくろして、マニユファクチュア時代の資本主義的生産の発展につれて、ヨーロッパの世論は恥と良心を最後の一かけらまで失ってしまった、<sup>(11)</sup>というのは、「諸国民ははじ知らずにも資本蓄積の手段たる一切の恥辱を自慢したからである」と。

資本主義的マニユファクチュアの発展をマルクスは、それ故、階級的矛盾の異常な激化とむすびつけ、労働者と資本家との闘争は資本主義的関係の生れた瞬間からはじまり、その後マニユファクチュア時代の全体を通じてはげしくなり、しかも賃銀額の問題をめぐって行われるのがふつうであることを指摘している。<sup>(12)</sup>

すでに工場制度の影響をうけている十九世紀のマニユファクチュアの問題についてマルクスは、そこでは廉価な未成年労働者の搾取が工場そのものよりももっと恥じ知らずのものとなっ



た、というのは工場では機械がいくらか肉體労働を軽減するからであるといっている。他面ではいわゆる家内労働制度のもとでは、搾取はマニユファクチュアよりもっとひどい、それは問屋制度のもとでは労働者の抵抗力が減少し、労働者間の競争が極限に達するからである。<sup>(13)</sup>

マニユファクチュアの資本主義的性質を明らかにしながら、マルクスはマニユファクチュアをすべて集中的な大経営とみなすことはできないことを指摘している。独自の研究の結果マルクスは、マニユファクチュアはその内部構造の点で二つの基本形態に分けられ、マニユファクチュアの二重性は生産物の性質そのものによって規定されている。後者は独立の部分生産物の機械的結合によってか、または「その完成した姿態を一連の連絡した諸過程および諸操作におよ<sup>(14)</sup>」。かれは第一の型を異種のマニユファクチュア（その例は時計生産）、後者を有機的マニユファクチュア（その例は縫針生産）とよんでいる。

しかし、集中マニユファクチュアが有利なのは例外的な場合だけである、それは自宅で作業したがる労働者たちの間の競争が極めてはげしく、かれらを用いると労働用具の共同使用の可能性がほとんどないからであるとマルクスはいっている。<sup>(15)</sup> 故異種のマニユファクチュアでは、問屋制度ないし分散マニユ

ファクチュアがとくに広く普及し、その場合に資本家は工場建物などの経費を節約しうるのである。<sup>(16)</sup> 反対に、有機的マニユファクチュアは、はじめはばらばらな手工業を総合して、労働生産場がつぎつぎと段階をへる時間を節約し、手工業にくらべてより高度の労働生産性に達するのである。この基礎の上に資本主義的大経営としての集中マニユファクチュアが生れるのである。

マルクスはマニユファクチュアの資本主義的性質を完全に明らかにし、資本の専制を伴うマニユファクチュア的分業を剰余価値を生産し、労働者階級を搾取する方法と規定し、それがいわゆる家内工業の制度においてはとるべき形をとることを明らかにした。マルクスはブルジョア経済学に伝統的なマニユファクチュア的分業を、社会的分業と同視する考え方が全く根拠のないものであつてきわめて反歴史主義的であることを論証した。かれはマニユファクチュア的分業が資本主義の発展の特定の段階の特殊的现象であることを示している。

マニユファクチュアの諸形態（異種のと有機的、分散のと集中的）にたいするマルクスの分析は、経済学史における新たな諸問題を完全に解決した。この場合、資本主義的生産様式の歴史における法則的な現象である分散マニユファクチュアの

資本主義的本質の分析はきわめて重要な意義をもっている。

エンゲルスもマルクスのこの結論と全く同意見であった、それはかれの多くの発言によって知られる<sup>(17)</sup>。

エンゲルスは資本主義的マニユファクチュアが時代的プロレタリアートの形成に大きな役割を果すと考えている。

「ルードヴィヒ・フォイエルバッハ」(一八八八年)でエンゲルスは「ブルジョアジーとプロレタリアートはひとしく経済的關係、もっと正しくいえば生産様式の結果として生れた。これら二つの階級はギルド手工業からマニユファクチュアへの、ついでマニユファクチュアから蒸汽と機械で武装した大工業への移行のおかげで発展したのである<sup>(18)</sup>」と指摘している。

このようにしてマルクス、エンゲルスは、マニユファクチュアの資本主義的性質を決して疑ったことがないのであって、このことはマニユファクチュア研究にとって一定の方法論的問題を提起するものであるといえるだろう。

- (1) マルクス「資本論」第一部、六〇一頁。
- (2) 「マルクス・エンゲルス選集」第一卷、四一〇頁。
- (3) 同書、第二卷、四七三頁。
- (4) 同書、第二卷、四六七—八頁。
- (5) 「資本論」第一部、五五—六頁。
- (6) 同書、五六三頁。

- (7) 同書、六〇頁。
- (8) 同書、五八三頁。
- (9) 同書、五九六頁。
- (10) 同書、五九七—八頁。
- (11) 同書、一五四頁。
- (12) 同書、六九一頁。
- (13) 同書、七四〇—四一頁。
- (14) 同書、五七一頁。
- (15) 同書、五七三頁。
- (16) 同書五七三頁。
- (17) 「選集」第十四卷、二一八—九頁。
- (18) 同書、第十五卷、四九三頁。